平成18年度 和歌山県名匠

【製竿師】

津田満雄

【現 住 所】九度山町　　（竿銘　至峰）
【生　　年】昭和4年

業績及び経歴

昭和21年にへら竿の創始者児島光雄（竿銘:師光）の一番末の弟子として入門し、製竿師の道に入る。2年半の修行期間中、その殆どを竿の材料となる原竹の選別に費やし、良質の竹を選ぶ目や感覚を養った。

昭和23年に「光作」銘で独立し、その後の昭和28年に「目標を高く定め、いつかは高峰に立とう」と現在の「至峰」銘に改名する。

優れた製品をつくるためには良質の素材原竹が必要であるが、原竹の選別には特に厳しい。へら竿は3～5本を継ぎ合わせて使うが、先端の穂先は真竹、2番目の穂持ちはスズ竹、3～5本目は矢竹と、使う竹の種類が異なり、中でも竿全体の性能を決める穂持ちの竹の選別は氏自身が山へ赴き切り出す。

すべての製作工程は一人での手作業で行い、道具も竿作りに適した特殊工具を自ら考案するなど、職人としての自らの仕事に妥協がない。

氏が作る竿は、「魚を釣る」という竿本来の機能を重視し、余分な装飾はほどこさない。魚を取り込みやすい穂先の調子、釣った時に竿全体がつくる形のよさ、握り部分の持ちやすさなどを重視しており、シンプルが故の無駄のない美しさがある。

厳選された原竹を用いて先調子に組み上げられた、こだわりのへら竿「至峰」は、その機能美と釣り味の良さで多くの釣り師を魅了し、全国で高い評価を得ている。

昭和52年に和歌山県技能賞、平成5年に労働大臣卓越技能賞、平成16年に黄綬褒章を受章し、昭和44年・45年には紀州製竿組合長を務めるなど、業界に多大な貢献をしている。